

白選五十一首



中野照子

堪へてあればしづかに時のすぎゆかむ紅さし指のうすきくれなる

『湖底』(旧かな)

漁火も消えて夜ふかきみづうみのみづから淡くひかるがごとし

ひとすじの青き絹糸歯に切りぬこの歯衰うる日などおもうな「しかれども藍」(新かな)

爪だちてくちづけを待つわが額ぬかを打ちて刃やいばのごとき雫よ

わが額にかそか触るるはわが髪にあらねはるけき岬さきに潮鳴る

つつじの花ふふめる今朝のみなもとに馥郁いっそくとあるひとつの言葉

はつなつの浅瀬いっせに一束の紫蘇いっそくあらう子を生きぬわれの素足ゆらげる

こころ常に寄り添うならず洗い朱の裾すそひるがへし交差路わたる

なつごろも透ときかなしく逢あいしかば戦いくさいのごと抱かかきたまいき

きぬぎぬを別わかれ来きしかばふりかえる北山の嶺たかねにはつか雪積ゆきむ

北きたさしてゆかよずなりたる二十余年今朝北山に冬の虹にじたつ

『花折峠』

昭和二十四年、米田雄郎先生に紹介され、

その場で弟子にしていた。その頃、俳句を作っていた私は、もう少し心を述べ得る詩型を、と考えはじめていた矢先であった。先生主宰の「好日」が創刊され、入社して一、二年の頃は、欠詠けいもしたが、短歌を止めようと思つたことは一度もない。作歌する苦心や苦勞は喜びを内包している。

第一歌集『湖底』は三十七歳のとき。自分の作品を客観的に見るなどほとんどできず(現在でもあまり変わらない)、亡き雄郎先生を継がれた米田登先生は、四百五首を選び、編集の仕方を取るように教えて下さった。

『しかれども藍』は、相聞歌や女心を詠よった作品がかなり編まれている。「生活詠や風物

行かざればひたすら紅し藪椿の花ちりしける去年のかの寺
 粗塩のかがやく白をいただきて年のおわりのてのひら清む
 七草粥小豆粥とて目を数うおりふし玻璃戸のかげり来て 雪
 見舞い来て水口みなぐちの町に朝顔の苗もとめたり友はもう死ぬ
 近江野の名なき濃森の夏落葉ふみつつあればおもかげは照る
 秋風に立つうつそ身の片側に宿る死ひたひたと水のごとしも
 あるときは標的なりしを去年今年青み寂びきし墓に手を置く
 田の中の掘り抜き井戸より清らけき水あふれおりここより若狭
 うつそ身のいまをすぎゆく音としもいずこにか杉の枝払うらし
 誠実に生きて知命を越えし夫の今宵野分のわきを捲きてかえり来
 うつそ身のおみなの残花たゆたうを黄の連翹の木ぐるみの花
 焰もてたわめ活けたるひめこぶし真夜蒼白の花ひらきたり
 花折峠に秋草たずぬる日の近づき微熱のような思いつのり来
 きみを葬るしろき広場に寒風かんふう吹きさらわれてゆく雪の上の雪
 ひと死して寒き人の世たちあがり常のごと飲食おんじきのもの買いにゆく
 立春きさらぎ美はしきひびきを持つ言葉先立てて来る春と告げたき
 雪まじる風に火のごとしだかるるここに生命をおろしし水仙
 大津の灯右手京の灯つましきを見放けて闇の芯となるかな
 自しがための襦袢を縫いて納いおく母の流るるごときもの言い
 夏の潮音うしおなくわれを包むごとし歳月を経てきみは満ちたり

『秘色の天』

詠を中心に選ぶこともできるが」との先生のお心づかいに、私は歌集として少しでも評価されるほうを、と答えた。いま、私の周囲の若い人達は、この第二歌集がいちばん面白いと言う。当時、私は四十歳代、独身に戻り、ある会社の寮に勤務していた。短歌という短詩型は、「私」を全く離れて読まれ、理解されることはむずかしいのではないか。『花折峠』の後半の作品は、勤めを辞め家庭に入ってからのものである。安定した日々を基盤に、心にふれる物事や目に視えるものを素直に、そして低俗にならぬように心して詠ったつもりである。そのなかで歌友・犬飼志げのの死は、半年近くの間、私の心を乱した。

『賀茂街道』は意図して「京都」を詠った。林和清氏は「京都をでなく京都で詠う」と深い理解を示された。望外の喜びである。

『賀茂街道』以後、原発が七基存在する敦賀半島、少女時代無心に泳いだ青い海を、今はただの風景として詠うことができない。

この稿を書いている窓から賀茂川の流れが光って見える。中洲は雑草が茂り、水は乏しく川は荒れている。美しい日本の京都、その姿の変転も深くみつめて詠いたい。日本を巻き込み急変する世界の情勢にも心が動く。

(なかの・てるこ「好日」)

さす日傘に魍魎魍魎も入れやりて三条河原の炎天の暑さ

枯れがれの木草の間に息づけるきいちごひとつぶひとつぶの虹

かきつばた生けあげて張る清水のひろらかにしてむらさき鎮む

葉洩れくる日にさざめきて遊びいる落ちこぼれたる稚き神神

鹿ヶ谷南瓜賀茂茄子日日ふとり祇園まつりの近づく暑さ

糊少し利かせる夏足袋きちきちと鳴るを履きおり窓の小暗さ

アクセルを踏み込むように落つる日を見届くくらき眼鏡はずして

無農薬新キャベツとて信長の首のようなる包みを提げ来

もみじ葉のひかり透さぬ葉脈の絹糸のようなそのころざし

黒谷の手漉きの和紙の唸唸と夜のたなごころにもものいうごとし

攻めのぼる標的なりしや朱雀門 まぼろしの朱うるわしくありしか

つかみどころあらざる京の昼ふかみ川面くだきて水浴ぶる鳥

立石岬 白き灯台王のごとし近づきて罪なき王をぞ仰ぐ

平らなる路岬端まで拓かれて日本海一望晴れつつ暗し

ウエルテルの悩みをなやみ若かりき年経りて憂いは肉体に即く

カサブランカ冴ゆる鏡を過りゆく数多の貌のなかななるあなた

角膜も臓器も使い古びたり どなたさまもかんにんどすえ

来ん世には木にならぬかと誘える北山杉の朱明かき幹

常闇の彼方に赤き火の起てり火は勢いつつ宙を淨むる

〔賀茂街道〕

〔賀茂街道〕以後（敦賀半島二首）